

[2012年度全国大会特別講演]

ラジオが担う安心安全の最新状況と今後の役割

～震災時のラジオの役割を中心として～

中島 誠一

この記事は、第8回情報システム学会全国大会・研究発表大会（2012.12.1）における特別講演の口述内容をまとめたものです。

私は縁あって、フジサンケイグループのニッポン放送という AM ラジオ局に入りました。一生の間に思いがけず、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌、ゲームコンテンツ、そしてインターネットのコンテンツまで経験しました。今日は、メディアの中でも一番愛着のあるラジオのお話をさせていただきます。これは思い出すのもまだ怖いのですが、昨年3月11日のあの震災以来、ラジオが見直されていることもあってのことかと思えます。今日はこのような光栄な、本当にうれしい場所を与えていただいたことに感謝を申し上げます。ありがとうございます。

1. 安全安心を担うためのラジオの特性

ラジオには皆さん親しんでいらっしゃると思いますが、真空管ラジオを知っているのは、かなりお年を召した方ではないでしょうか。私が大学生時代に使っていたトランジスタラジオももう古いです。現在は IC ラジオや小型のものがあります。

震災以降、非常持ち出し袋を家庭でご用意されている方がいらっしゃると思いますが、その中には昔から、ロウソク、マッチ、懐中電灯が

Seiichi Nakajima

アイジョッキー代表

第8回情報システム学会全国大会・研究発表大会 [特別講演]

2012年12月1日受付

© 情報システム学会

あって、必ずラジオもあるかと思えます。それだけラジオは何かあったときに頼りにされてきたのです。ラジオはメディアとして非常に身近なものですが、震災のような非常時に、大変頼りにされてきたというところから考えてみたいと思います。

ラジオには AM と FM があります。FM の場合は周波数の高いところを使いますので、テレビと同じような電波の性格があり、山があると届きません。AM の電波は中波といって波長の非常に長いところを使っているのも、伝搬特性がテレビや FM ラジオとは違います。ニッポン放送は関東一円にサービスをする東京のキー局ですが、全国ネットのキー局でもあります。世界中、いろいろなところにラジオを聞くマニアの方がいて、「聞いたよ」というお便りをもらおうと、ラジオ局は QSL カードという認証カードを差し上げるのですが、関東一円に放送しているつもりが、何とフィンランドやノルウェーなどからも来るのです。これはテレビや FM ではあり得ないことです。AM 放送は、特に夜間の電離層に反射して遠くまで飛んでいきます。電波は直進せずに反射するという性格を持っているので、地球の裏側の放送が聞こえたり、日本でもヨーロッパやアメリカの放送が聞こえたりします。伝搬特性上、AM 放送は山を越えてかなり広範囲に飛ぶので非常に特殊です。

皆さんは鉱石ラジオやゲルマニウムラジオ

をご存じでしょうか。私は小学校のときにゲルマニウムラジオを作りましたが、聞こえたときはうれしかったです。ゲルマニウムラジオの中に入っている部品はほんの少力で、4~5個しかありませんが、それでラジオが聞こえてしまうのです。私はAM放送の送信所に10年ほど勤務していましたが、雨の日に放送局の近くの桜の木の下を通ると、木の上の方から音楽が聞こえました。よく聞くと木が「ニッポン放送」と言っています。雨が降ると、2枚の桜の葉がうまく重なったところが半導体か何かになってAMの電波を拾い、その高周波を人間の耳に聞こえる音波に変換しているのです。これは本当です。うそではありません。従って、物理学的に言うとAMは非常に簡便なものです。そういう意味では、技術的には蒸気機関車のような原始的なものですが、ある意味でメディアとしては手に入りやすいのです。

皆さんは不思議に思うかもしれませんが、AM電波の送信所は、垂直の自立鉄塔に支線を張ります。電波の波長の分、長さが欲しいのですが、AMの場合は200~300mになってしまうので半分の長さに切って支線を付けて、100mとか、長くても200m弱のアンテナを各社が立てます。テレビの場合、今度スカイツリーに移りますが、東京タワーから放送しているので東京タワーが心臓です。NHKは総合、教育の二つ、TBS、日テレ、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京、みんな東京タワーから放送しています。昨年3月11日に東京タワーの上の方が少し曲がってしまいましたが、あの東京タワーが壊れたり、停電があったりしたらテレビは全部止まってしまう。これはつらいです。もちろん予備送信所を持っている会社もありますが、心臓は1個しかありません。

ラジオの場合は、東京キー局だけでもNHK第1と第2、TBS、文化放送、ニッポン放送があります。私のいたニッポン放送は千葉県木更津市にアンテナを持っています。電波を出すと木の葉が歌ってしまうので、住宅の近くには置けないのです。文化放送は埼玉県鳩ヶ谷市に、TBSは埼玉県戸田市に、NHKは久喜市にというように、都心にはありません。都心に置くと

電波がいろいろな悪さをします。例えば録音機やアンプに乗ったりして、本来、私の声だけが聞こえていけばいいのに、ここで歌を歌ってしまったりするので、放送局は遠くにあります。ですから逆に言えば、私が勤めていたニッポン放送の木更津が停電しても、戸田のTBSと一緒に停電になることは確率的に少ないでしょう。FMは東京タワーに乗っているということもあり、AMラジオは災害時に強いメディアというイメージで皆さんから信頼されていると感じています。

2. ラジオ局としての備え

皆さんから信頼されるために、ラジオ局ではいろいろな準備をしています。私が現職のときには、大震災時の緊急対応マニュアルを社員全員に配っていました。

私は理系でシャイで人見知りで、こういうところで話すのは大嫌いです。普段は本当に無口で寡黙な男ですが、放送局に勤めて技術の仕事をしていたら何か勘違いされて、番組の企画をしろという話になり、番組の内容を作ったり、誰を連れてきてどのような放送をするかといったことを企画する編成部というセクションにいました。それから、営業の企画もしました。ラジオの営業は広告代理店と一緒に働いて、スポンサーのところに番組を売りに行きます。ですから、皆さんのところには行きません。皆さんに「要りませんか」と言ってくるのはNHKだけです。それから、突然「出向しろ」ということで、子会社のポニーキャニオンに行ったこともあります。ニッポン放送では経理もしましたが、4カ月で首になりました。ちなみに送別会では、経理部長から「口が裂けても経理をやったと言っては駄目だぞ」と言われています。

経理も人事も営業もみんな、大震災時の緊急対応マニュアルをもらいます。毎年総務から改訂版が来て必要なページを差し替えますが、これには社員としての心構えから始まり、社内のシステム、震災があったときはどういう形で何をするか、放送をどうやって守っていくか、情報をどのように入れるか、放送の内容をどうす

るかということが事細かく入っています。

それからもう一つ、アナウンサー用のコメント集というものがあります。「ぐらっと来たら」というページから始まり、揺れたらどうするか、気象庁から出た情報をどのようにとらえて、どのように対応するか、そのコメントが全部載っています。社員はみんなこれを持っているし、主要な場所にも置いてあります。現場で放送をやっている人だけではなく、放送局員として、経理も営業もみんなこういうことは心得ておくということになっているのです。

ラジオの放送局はテレビには映らないので、どのようなところで放送しているのかをイメージして皆さん聞いていらっしゃると思いますが、ニッポン放送のスタジオにはテーブルがあり、マイクロホンが4本立っていると思います。副調整室にはディレクターやプロデューサー、ミキサーがいて、ガラスの窓からスタジオを見ながらコントロールしています。アナウンサーのテーブルの横には、先ほどのアナウンサーのマニュアルから抜粋したコメントがそのまま書いてあります。揺れが到達する前は「気象庁から関東地方に緊急地震速報が発表されました。揺れに注意してください」というように事細かく、原稿がなくてもアナウンサーはこれを読めばいいという体制になっています。

それから、送信所もスタジオもそうですが、放送局の全設備は基本的に二重化されています。二重化と言うより多重化されていると言った方がいいかもしれません。例えば、アンテナは人間が作ったものなので、倒れるなど何が起こるか分かりません。ニッポン放送は足立区竹の塚に予備送信所を持っています。私が入社した昭和48年(1973年)までは足立区にアンテナがあり、そこから放送していました。免許の書き換えに伴い、当時の郵政省から出力アップの許諾を得て、関東地方のラジオ局は3局とも50kWから100kWになったのですが、100kWというのは相当なパワーで、足立区に団地がたくさんできたことと、先ほど言った木の葉が歌うということも含めて、仕方なくニッポン放送が遠くへ行くことになりました。残った足立区

の施設は、縦のアンテナは取ってしまいましたが、いざというときには横に100mぐらいの鉄線を張って、これをアンテナにしています。これにより木更津にあるニッポン放送の送信所が壊れた場合でも送信でき、逆に北区や足立区などの方々にはニッポン放送がよく聞こえるようになると思います。

自家発電という言葉は、昨年の震災以来いろいろなところで聞いていると思います。病院、施設、学校はみんな自家発電機を持っていますが、当然、放送局も強力なパワーを使うのでディーゼルの巨大な機械を持っています。東京電力からの給電は2系統あります。昔は高压線から1本しか来ていなかったのが半日も停電していましたが、最近はスマートグリッドやコンピューターで給電が管理されていて、切れたところを迂回して違う地区を通って来るので回復が早いのです。それでもニッポン放送の場合、木更津の送信所には二つの系統が入っているので、一方で停電しても、もう一方に切り替えることができます。

3. 地域との連携

ラジオ局は番組を運営していく上でいろいろな工夫をしています。ニッポン放送だけでなく、NHKを含めた東京のラジオ局はライフラインネットワークを持っています。1995年に阪神・淡路大震が起きたとき、われわれは現場で相当なショックも受け、それまでの自分たちの対応はまだ生ぬるかったという教訓を得ました。そこで、情報網を緊急時に備えてしっかり作り上げていこうということで、NHK、TBS、文化放送、ニッポン放送、ラジオ日本、FM東京、J-WAVEで連携し、東京電力、東京ガス、東京都水道局、NTT東日本、NTTドコモなどの、要は生活を維持していくために必要なものを供給している会社との間に取材ネットを常設することにしました。何か事があったときには全員が聞きに行っても煩わしいので、幹事社をサイクルで決め、幹事社が代表して各社に取材し、それをこのグループで共有することにしたのです。

それから、ニッポン放送は安否情報網を 20 年以上持っています。昔は AM ラジオを聞いてくださる床屋さんが多く、タクシーの運転手さんはみんなラジオを聞いてくださっていたので、タクシー協会や理容組合などと協定を結び、何か事があったときには優先して、どこの都市がどうなっているか、どこの道が通れるか、どこで火災が起こっているかという情報をもろうようにしています。今はラジオではなく BGM などを流している方も増えていますが、ニッポン放送と契約してきちんとした情報を出そうという方々がいらっしゃいます。

それと同時に、ニッポン放送は有楽町に本社があるので丸の内地区から始めましたが、丸の内地区の民間企業の総務部と連絡を取って、社員がどういう状況にあるかという情報ももらっています。地震が起きたとき、家族の皆さんは、お父さんはどうなったのか、帰ってこれるのかどうか心配です。3 月 11 日も帰宅困難者が出て大変でした。そういうことを想定して、ラジオで会社がどうなっているかを伝えれば、ご家族は安心できるだろうということで、このような網を張りました。当然、これは学校にも伸ばしました。帰宅させたとか、学校内に泊めているといったことも含めてニッポン放送にいち早く情報もらい、家庭に情報を伝えます。これは各局というよりはニッポン放送で行っていることです。ラジオを頼ってくださいと言うと、それなりに皆さん一生懸命考えるわけです。

4. 国レベルでの対応

今回の震災後は特にそうですが、国レベルでも以前からいろいろな対応があります。震災のときには電話は通じませんが、実は保全された、壊れにくい電話網があります。その電話網を優先して使えるのは、政府関係者、自衛隊、警察、気象庁、そして放送局です。国はいろいろな考え方の中で、指定公共機関など重要なところには確度の高いものを優先して配置してくれます。ニッポン放送にも赤い電話があり、全く切れないかどうかは分かりませんが、地震のとき

でも切れにくいのです。それは当然、報道機関としての使命があるからそういう優遇を受けているということです。

国民保護法は平成 16 年にできた法律で、これは地震ではなく、武力攻撃をされたようなケースで国民と国民の資産をいかに守るかというのですが、これにも放送局が適合しています。放送局は義務としていろいろな情報を率先して流すことになっていて、それにも基づいて国レベルでも率先して対応するようになっています。

それから、緊急警報信号システム (EWS) をご存じでしょうか。30 年ほど前、私がまだ技術をしていたときに、震災時にテレビやラジオを自動起動させたいということで、郵政省の電波監理局にワーキンググループができました。寝ているときに警報が出ても分かりませんが、ラジオが騒ぎだせば、あるいは突然テレビがついたら起きるでしょう。そういうものを作ろうということで、私もそのワーキンググループでいろいろなことを実験しました。システムというのは怖いもので、突然起こされたのに何もなかったらトラブルも起こりかねないので、誤動作は許されません。そういうことで、散々実験して作った音があります。

「ただ今から、緊急警報放送システムの危険信号を発信します。専用の受信機をお持ちの方は、受信機がいざというときに正確に働くかどうかチェックしてください。では、危険信号を発生いたします」

信号音

今の音を聞いてお分かりになった方もいらっしゃると思いますが、これは毎週月曜日の放送開始前や、NHK ではお昼の時間に実験放送しているものです。このトーンを流すことにより、それを受けて自動的に電源が入る機械があるのですが、残念ながら 30 年たってもあまり普及していません。このようにいろいろなシステムを考え、放送局としての使命の中で準備をしてきました。

5. 2011年3月11日の震災時の対応

今日のお話をすると、どうしても昨年の震災を思い出すわけですが、これからお聞かせするのは、3月11日のあの時間にニッポン放送がどのような放送をして、どのような状況だったのか、それから震源地に近いラジオ福島ではどうだったかという録音です。思い出すと非常に心が苦しいという方もいらっしゃるかもしれませんが、聞いていただければと思います。

「あ、ちょっと揺れているね。今、スタジオで地震を感じていますので、ちょっとそのままお待ちください。今、東京地方、有楽町のニッポン放送のスタジオでも感じております。細かく揺れていますが、ニッポン放送の震度計で2が出ましたね。2時47分に震度2が出ているのですが、まだ何か細かく嫌な感じで揺れていますのでご注意くださいね。長く振動が続いていますのでご注意ください。もしかしたらこれが大きなものになる可能性があります。東北地方の地震ではないかということなのですが、詳しいことが入りましたらお伝えいたします。今まだかなり揺れています。自動車を運転している方も急ブレーキはかけないようにしてください。しかし、今、相当揺れておりますので十分にごご注意ください。今、関東地方はかなり大きく揺れています。かなり大きく揺れています。気象庁から緊急地震速報等は出ておりませんが、かなり長く揺れていますね。車を運転している方、十分にごご注意ください。車はハザードランプをつけて、ゆっくりとスピードを落としてください。また、火の元には十分にごご注意ください。まず自分の身を守ってください。東京有楽町のスタジオはかなり揺れております。まず身の安全を守ってください。上から落ちてくるもの、倒れてくるもの、十分に注意してください。車を運転中の方、ハザードランプをつけて、スピードを落として、安全を確かめてください。かなり大きく揺れています。皆さん、ご注意ください。海岸近くの方、津波にも十分に注意してください。こちらニッポン放送です。今、関東地方がかなり強く揺れています。ご注意ください。自分の身の安全をまず守ってくだ

さい。車を運転している方、ハザードランプをつけて、スピードを落として、安全を確かめてください。海岸近くの方は念のために津波を警戒していただきたいと思います」。

続いてラジオ福島です。

「あ、地震ですね。今、揺れております。スタジオが揺れております。皆さん、身の安全を確保してください。大きな地震が起きております。身の安全を確保してください。大きな地震が起きておりますので、身の安全を確保してください。周りから落ちてくるものがないかどうかを確認してください。身の安全を確保して・・・大きな地震が起きております。スタジオも今、これは非常に大きな地震です。非常に大きな地震です。身の安全を確保してください。それから、沿岸付近にいらっしゃる方は津波の恐れがありますので、沿岸付近から離れてください。今、スタジオも荷物が落ちてきたり、ものが落ちてきたりしております。まずは心を落ち着けてください。心を落ち着けてください。運転中の方は車をゆっくりと止めて、ハザードランプをつけてください。大きな地震が起きております。福島県内で大きな地震が起きております。まだ地震は続いております。収まるまで身の安全を確保してください。建物の中が危険と感じた場合は屋外に出てください。大きな地震が続いております。大きな地震が続いております。ラジオ福島のスタジオも揺れが続いております。揺れが続いております。福島県内で非常に大きな地震が起きております。福島県内で非常に大きな地震が起きております。地震の揺れが収まるまで身の安全を確保してください。非常に大きな地震が起きております。福島県内、非常に大きな地震が起きております。周りから落ちてくるものにご注意ください」。

これを聞くと、すごい地震だったと思います。スタジオの中であれだけの揺れる音が聞こえたり、何かが落ちているような音が聞こえたりしています。皆さんはどうお聞きになったのでしょうか。私はあのときは怖かったです。アナウンサーも怖かったと思いますが、必死にこのコメントを読んでいました。もちろん自分の身の安全も大事ですが、これを聞いている人たち

の身の安全を守るという使命感からだと思えます。

東京も相当揺れました。建物や場所によってはかなりの被害が出たところもあります。有楽町のニッポン放送はお堀から1ブロック入ったところで、丸の内警察署の隣にあります。8階建てのビルで、スタジオがある4階も相当揺れましたが、6階以上のフロアは棚が倒れてきたり、会議室の蛍光灯が落ちたりしていました。

私の知る限り、報道機関ほど汚いところはありません。新聞社のごみ屋敷のようで、古い記者になると30~40年分、取材した記事が全部積んであり、触ると「何で触るんだ。どこに何があるか、おれは全部知っている」と怒られます。しかしすごいのは、ほかの人には絶対に分からないのですが、「昭和〇〇年の〇〇の記事は・・・」と、すぐに出てくるのです。その山積みの記事が全て崩れました。ラジオ局のフロアも非常に雑然としており、それがみんな崩れました。メディアとしての安全対策をしている割に、自分たちのいるところの対策はしていなかったのかもしれない。

地震の後、メディアは有効な手段であったかどうかを民放連が調査しました。被災地では、ラジオの接触率、有用性評価がメディアの中で群を抜いていました。これはラジオとしてはうれしいことです。それから、テレビ(ワンセグ、車載含む)は停電下にしてはおおむね高い接触率・評価が見られました。ワンセグを見ていた人もかなりいましたが、多くの人がテレビを一生懸命見ようとしていました。新聞は、被災地に近づけば近づくほど手に入らない状況が続いたと思いますが、震災後、2~3日以降から評価が急速に上昇しています。また、これは意外だったのですが、防災無線はたくさんあるので、電源が切れて駄目だった場所や、津波の中、防災無線を放送しながら亡くなった方もいらっしやったというように、地区やそのシチュエーションにより状況に大きな違いがありました。通話とメールも地域差が大きく、アンテナが使えなくなった場所では全く機能しなかったでしょうし、輻輳もかなり起こっていたようで、いくら電話してもつながらないという

状況が見られました。

しかし、関東地方があれだけ揺れたにもかかわらず、震災当日の地上波のラジオやテレビの停波はほとんどありませんでした。東北地方でも完全に止まった放送局はなかったと思えます。東京地区ではライフラインネットワークが初めて機能しました。昨年3月11日は、FM局のJ-WAVEが幹事社となり、そこが中心となって取材したものをほかの放送局と共有して流していました。ただし、NHKだけは独自の取材・放送をしていたので、ネットワークを使わなかったと思えます。

メディアがどのように役に立ったかを調査した結果があります。民放連が仙台市などの仮設住宅に暮らす500人に聞いたところ、実際に役に立ったものではラジオが半数近くを占め、次いで家族や隣人という回答を得ました。震災後3日から1週間たつと、家族や隣人は増えているものの、ラジオも増えています。みんなラジオを一生懸命聞いていてくれたのです。不安の中で一体どうなっているのか、自分はどうしたらいいのか、そのよりどころをラジオに求めたのだと思えます。

また、情報支援プロボノ・プラットフォーム(iSPP)という機構が、震災時に利用した情報ツールや機器を調査しました。震災前のラジオ46%という数字は高すぎるような気がしますが、震災当日はラジオが半数以上を占めてもちろん1番で、携帯電話やテレビを断トツで引き離しているように思います。震災発生から1週間以内では、ラジオがもっと増えて75%です。ここで携帯電話とテレビも上がってくるのですが、それでもラジオが1位ということから、ラジオが頼りにされているのはうそではないことを、われわれは確認しました。

6. 安心安全を担うための準備

こうした状況の中で、これだけ信頼されているラジオを、われわれは今後の対応を含めてどのようにしていけばいいのでしょうか。社員は全員、配られたマニュアルに普段から心しており、スタジオにはコメントが張ってあって、何

か起こったときにはすぐに対応できます。もちろん震度計も用意しています。報道機関、マスコミ、ジャーナリストとしての誇りもあったのですが、自分の家が壊れてしまったので、放送をしながらも結構大騒ぎしていました。けが人こそありませんでしたが、みんな普通の人なので、自分の家の土台が崩れると、そちらの方に意識がってしまうのです。それで自分たちが被災者になることをあまり考えていなかったということを見つけたのです。

報道機関なので、何かあれば一生懸命報道しなければいけません。あのときは昼間だったので社員はまだいましたが、夜間に起こったらどうするのか。キー局は全部そうですが、泊まり込みのアナウンサーがいます。それから、原稿を書かなければいけないので報道も泊まりますし、機械が壊れたら困るので技術も泊まります。この3人は必ず泊まるのですが、それに加えてニッポン放送には管理職の宿直が必ず1人います。管理職の宿直は嫌がられますが、現場だけではなかなかうまくいかないのです。司令塔として、正月三が日でも土日でも輪番で管理職がいます。それから、重要な3カ所のセクションは1人ずつ必ず泊まることになっています。昔は女性は絶対に泊りませんが、最近では女性も当番で泊ります。

夜間に地震が起こったとき、どうやって会社に来るのでしょうか。今回は帰宅困難もありましたが、直下型になると橋が落ちたりもします。ニッポン放送は有楽町にあるので、最近では台場や東京湾岸沿いに住む社員が増えてきていますが、私は技術で送信所の係だったときは埼玉に住んでいました。オートバイが1台支給されており、いざとなったらオートバイで木更津に行けと言われていましたが、本気にしていませんでした。上司から「1回だけ行ってみる」と言われたのですが、「絶対に嫌だ」と突っぱねて行きませんでした。おかげで給料が下がったかもしれません。もちろん普段からツーリングをされている方はいいかもしれませんが、私はオートバイにほとんど乗ったことがなかったので、埼玉から木更津に行けと言われても無理でした。

頭の中で考えることと実際とでは随分違っているということに関して、今回は責任を持つ立場として非常にいい教訓を得たと思います。例えば、東海地震あるいは直下型地震に対してはいろいろな想定をしていましたが、今回のようなケースは想定外でした。地震予知連絡協議会が予知してくれていますが、気象庁は最近「予知」という言葉を使わないようにすると言っています。今回の震災はわれわれに、地震は予知できない、原発は絶対に安全ではないという科学の限界も含めて、人間の限界をかなり教えてくれました。そういう中で、準備する方も完ぺきな準備はできません。

今回のケースで私が問題だったと思うのは、結局ニッポン放送もほかの局も、本当の大震災対応ができていなかったことです。民間ラジオ放送のTBS、文化放送、ニッポン放送、それから、テレビでは日テレ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京など、要するにコマーシャルを出している会社は、自分の放送局の番組であるにもかかわらず、それを買ってくれているスポンサーに無断で番組を中断したり、放送をなくしたりすることができません。ただし、気象庁から震度5強の地震が関東地方で起きると予告された場合は放送を打ち切るということは、事前にスポンサーに言ってあります。ところが、今回は本当にぎりぎり、放送局は震度5弱と伝えられたために、営業と報道と経営者とでもめてしまいました。営業は、自分が苦労して売ったスポンサーから「金を返せ」と言われたり、信頼を失ったりする可能性も含めて、どうしてもスポンサー寄りになります。一方、報道は「何をしているのだ。こんな大ごとなのだから番組をやめろ」と言います。そこまですりかきはしませんでした。そういうことがありました。

つまり、震度5強の対応ができていないので、すぐに臨時放送に切り替えて対応できなかったところが反省です。皆さんはこの話をお聞きになったことはないと思いますが、そういうことを含めて誰が線引きをするのか、どちらを向いてやるのか、それに誰がはんこを押すのか、トップがどこかに行っていたらどうする

のかという話も含めて、反省はかなりあったと思います。

それから、ハードで想定外だったのは計画停電です。送信所には発動発電機があります。重油で動くのですが、無制限に重油を置いておくわけにはいかないのです、せいぜい3~5時間分しか置いていませんでした。木更津の場合、計画停電は免れたのですが、今後のことを考えると、計画停電が何時間かかるかというよりも、電力が供給されない時間がどのぐらい続くかということも含めて、長期化の対応についてはこれからの課題です。いくら準備してもしきれないというところがあるにしても、ではどうするのかを考えなければいけません。

あとは細かいことになりますが、震災後、たくさんできたコミュニティ FM がどのように機能するのか。それから、総務省の電波管理が開放に向かい、臨時災害 FM などの放送もいろいろなことに役立てようとしているのですが、うまく機能するのか、それを誰がどう運営していくのかという話もあります。

電車の中で携帯電話が一斉に鳴り出したという記憶があるかと思いますが、緊急地震速報は2007年の気象業務法改正で気象庁に義務付けられました。これは震度5弱を予想した場合に鳴らすのですが、ここにも線引きの問題があります。地方の放送局は震度5弱で警報を鳴らすのですが、3月11日のときは、関東地方のNHKは出しましたが、民放は一切出ませんでした。出さなかった理由は先ほど申し上げたように、民放は震度5強の場合に出すと決めているからです。なぜ気象庁は震度5弱で出して、民放は震度5強で出しているのかということ、そこにもスポンサーとの力の落ち着きどころがあったり、震度5弱は頻繁にあるからという話もあったりします。そういうことが課題としてまだ残っていると思います。

7. メディア変化の中でのラジオの役割と国民の安心安全

ラジオは非常に簡便な装置で、皆さんはラジオに親しみ、信頼を置いてくださっていると聞

くと、私は笑ってしまいます。なぜかということ、今は誰もラジオを聞いていないことを知っているからです。ある学校で学生のメディア接触度を調査しました。300人程度の調査なのでサンプルとしてどうかとも言われるのですが、一応傾向が見えます。ラジオを毎日聞く人は、2009年は2.6%、2010年は1.5%、2011年は1.9%、2012年は3.9%でした。テレビはレイティング（視聴率）を取っていて、レイティングが高いと調子がよく、レイティングが低いと番組が中止になったりします。ラジオは毎日取っておらず、2カ月に1回取っていますが、ラジオの場合は調査票が無作為に送られてきて、それに線を引いて返します。その調査で出てきたラジオを聞いている率と、今回のメディア接触度の調査結果はほとんど一緒なのです。つまり、今現在、全年齢層で普段ラジオを聞いている人はそのぐらいしかいないということです。ラジオを聞いている方もいらっしゃるのですが、思い返していただくと、ここ何年も聞いていないとか、ラジオがどこにいったなどという方もいらっしゃると思います。

今年増えた理由は、震災によりラジオを聞かなければいけないと思ったからかということ、この年齢層の大学生は違うと思います。聞いてみると、増えているのはインターネットラジオです。どこを聞いているのかと聞くと「オランダの局だよ」と言うので、ラジオを聞いているといっても、ニッポン放送を聞いている人がそれだけ増えたわけではないようですが、このような結果が出てくると、ラジオはどうしたらいいのだろうかと思います。新聞も読まれなくなっていますが、逆に携帯のサイトはどんどん増えています。インターネットでも、パソコンのサイトよりスマホのサイトを見ている人が増えています。

放送と通信の融合という話で思い出していただきたいのですが、ホリエモンという人がいました。ある日、私が会社に行ったら知らない人がいて、突然「ここはおれの家だ」と言うのです。自分の家に帰ったら知らない人がいて、「ここはおれの家だ」と言われたら怒りますよね。「買ったのだからおれの家だよ」と言われ

ても、「おれは売っていない」と言うでしょう。会社とはすごいもので、一夜にして買われてしまうのです。つまり乗っ取りです。ホリエモンの事件はいろいろありました。最初は三十数パーセントでしたが、結果的に 51% 持った時期がありました。そのときは本当にオーナーになってしまったのですから驚きます。われわれは入社以来、ずっとニッポン放送としてロイヤリティーを持ってやってきていたのに、ある人が突然来て「これからはネットと放送の融合をやるのだ」と言うのです。話を聞いてみると、どうもあの人の言う「融合」とは株価を上げることだったような気がします。やはり放送と通信の融合を含めて、今後ラジオというメディアはどうしたらいいのかというところに差し掛かっているように思います。

放送局の現状を見ると、NHK はラジオも放送していますが、AM や FM は付録で、皆さんからお金をもらっているのはテレビ、BS です。ラジオはお金をもらっていないので、どうしても力が入りませんし、NHK の内部にいますと「おまえはラジオをやるのか。かわいそうだな」などと相当下に見られてしまいます。民間放送は、グループとしてはフジテレビグループがありますが、ラジオ単営社といって、ニッポン放送はラジオだけを運営しています。ラジオ単営社は、今、地方局なら地方局ほど経営は苦しいです。ご存じのようにコマーシャルでなかなか高く買ってもらえないので経営状態も悪く、投資もできないような状況になっています。ラジオとしてはそういう問題を抱えているのです。

私個人としては、ラジオの生活を長くしました。その後はテレビ番組を作ったり、編集長から原稿をたたきつけられて雑誌の記事を書いたこともありますし、ゲームソフトやインターネットのホームページの企画をしたこともあります。

メディアにはいろいろあります。例えば、通信メディアとパッケージメディア、マスメディアとパーソナルメディアというような仕分けがあるにしても、人間の五感で考えると、メディアは両側に人がいます。その両側にいる人が道具としてそれを使ったとき、人間はどのよ

うに受け取るか。ラジオは聞く。テレビは見ると言いますが、実際には音も聞こえています。雑誌を読む。ゲームをする。インターネットラジオもそうですが、デジタルメディアが人間の五感のうち触る感覚をコントロールすることにより、接触するところまで、ある種の情報を伝えていると感じるようになりました。なぜかという、それを送る側が制御することが可能だからです。これはゲームをしていてよく分かりました。ゲームについては、さくさく軽い感じ、逆に重たい感じで送ることができることが分かってきています。

従って、今の最先端に行くメディアは、聴覚、視覚、触覚の情報を送れる三次元のメディアだと思います。それなりにいろいろなメリットはあるのですが、一方、ラジオは非常に原始的な、一次元の、しかも聞くだけのメディアです。しかし、一次元のメディア独特の特性を持っていて、仕事をしながら聞けるのです。もっとすごいのは、パーソナルメディア的であり、心理的に訴えてくることです。自分のイメージで聞くので、パーソナリティが自分の知っている人なのです。その人が言うことは信頼できるという関係が結構あります。

例えば、ラジオショッピングやテレビショッピングがあります。ラジオショッピングで何かを買ったことがある方はいらっしゃるでしょうか。ラジオショッピングにおいて、過去に私が知っているもので一番高いものは三十数万円のミンクのコートでした。100 着以上売れましたが、返品はゼロでした。テレビの場合は、同じものを売ると返品が 10% あります。これがメディアの差です。

そのようなことも含めて、やはりラジオはなくてはならないものです。最終的に言うと、メディアの両側にいる人間のことを考えたシステムを作り、災害に対しても何らかの方法を考えていかなければいけません。国策的には、AM をなくすことは対外的な闘争を含めてないでしょうけれども、商売としての AM をなくしたくはないと考えています。最後は暗い話になりましたが、これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました（拍手）。